

すぐに役立つ

# 開発指標の話

第1回

## 開発指標とは何か

野上裕生

開発途上国の実情を分析する上で統計資料を利用しなすませることはできない。統計資料の利用はただ単に経済分析だけでなく、社会や政治の領域にも及んでいる。また寿命や死亡、出生といった人生の重大事項は人口統計を子細に眺めればかなりのことが理解できる。統計指標一般とは区別して、開発研究と深い縁のある統計指標を「開発指標」(Development Indicators)と呼ぶことにしよう。

### ●「計測」と「要約」のための開発指標

開発指標の任務は二つある。第一は重要な概念を客観的なもの、計測可能なものにするのである。開発研究の分野には「生活の質」「エンパワーメント」「社会関係資本(ソーシャルキャピタル)」「貧困」「不平等」「持続可能性」という概念が良く出てくる。しかし、これらの概念を現実の政策に反映させるのは非常に難しい。まず「エンパワーメント」「持続可能性」「生産性」という概念が特定地域や集団に現実にあるわけではない。社会を「ソーシャルキャピタル」「持続可能性」という視点で見たら、

どのように違って見えるか、ということでも提案されたものが開発研究の概念なので、「もし〇〇が社会に存在するとすれば、どのような大きさになるか」という具合で、その質や量を評価する方法は特別に工夫しなければならぬ。人口や土地面積のよう

に対象が物理的な「もの」として存在し、大きさの評価が比較的容易なものとは違って、開発研究で重要な指標は何らかのルールに従って作成されている。農産物の生産額にしても、それが「生活の豊かさ」や「国の生産力」を示すためには、その生産額を一人あたりの値にし、そこから得られる純収入や実際に消費に向けられる量を評価しなくてはならない。また指標を作成することとで「概念」の意味がより正確になることも多い。たとえば「貧困」の指標として、かつては支出に占める食費の割合(エンゲル係数)やカロリー摂取量などが利用されたことがあった。しかし、生活費に占める衣服や暖房、住居費用は日本国憲法第二十五条の「健康で文化的な最低限度の生活」には欠かせないのではないか。カロリーの少ないお茶やコーヒーも貧困層の食生活に

とって重要ではないのだろうか。このような疑問から「貧困指標」も進化していったのである。

開発指標のもうひとつの任務は情報の要約ということである。「景気回復」や「環境の質」、あるいは「生活の質」といっても、それに関わる要因は非常に多い。景気判断に関わるものは生産や販売・消費だけでなく、所得や雇用なども含まれる。ひとつの指標だけに注目しすぎれば大局的な景気判断を誤る可能性も大きい。そこで生産、消費、販売、雇用、所得といった経済の分野を網羅し、それらの指標の持つ情報を偏りなく要約して統計指標の意味を明確に表現できる要約の指標(景気動向指数)が必要になってくる。このようにして、開発指標は「要約」という任務も担う必要があるわけである。

### ●「理論なき計測」と「データなき計測」

開発指標を上手に利用すれば開発途上国の問題が非常に鮮明になるのは確かである。しかし、統計指標を上手に利用するのはな

表 開発指標の変遷

	福利厚生の意味	重点領域	重要な理論など
1940年代	経済的福利厚生	国民経済計算の形成	ケインズ経済学
1950-60年代	経済的福利厚生	一人当たりGDP	経済成長理論
1970年代	ベーシックニーズ	一人当たりGDP+基礎的財・サービスの指標	所得分配や貧困、インフォーマル部門に関する研究
1980年代	経済的福利厚生	一人当たりGDP+非貨幣的指標への注目	新経済成長理論、ケイパビリティ
1990年代	人間開発	人間開発と持続可能性に関する指標	環境、ジェンダー、制度派経済学
2000年代	普遍的な人権、生活(Livelihood)	ミレニアム開発目標(MDGs)指標+新領域(ガバナンスや人権など)	リスクやエンパワーメント、制度構築

(出所) Andrew Sumner の2006年論文のTable 3.1に加筆した。

(参考文献)

経済データで手軽に読めるものとしては鈴木正俊『経済データの読み方(新版)』岩波新書、2006年がある(この本の54-59ページの「景気動向指数」の項目を今回参照した)。ミッチェル、クープマンズ、ノードハウスたちの議論の原典は以下のものである。

Koopmans, Tjalling C.(1947) "Measurement without Theory", *Review of Economic Statistics*, Vol. XXIX, Number 3, August, pp.161-172.

Mitchell, Wesley C.(1925) "Quantitative Analysis in Economic Theory", *American Economic Review*, Vol. XV, No.1, March, pp.1-12

Nordhaus, William D.(1973) "World Dynamics: Measurement without Data", *Economic Journal*, Vol.83, No.332, December, pp.1156-1183

上記の表はSumner, Andrew (2006) Economic Well-being and Non-economic Well-being, in Mark McGillivray and Matthew Clarke eds., *Understanding Human Well-being*, Tokyo:United Nations University Press,pp.54-73.を参考にした。最後に、開発問題(開発経済学)について最初に読むのであれば朽木昭文・野上裕生・山形辰史編「テキストブック開発経済学(新版)」有斐閣、2004年などがある。

ミッチェルは一九二四年二月二九日、アメリカ経済学会会長講演(シカゴ大学)のなかで経済理論を客観的に検証するための統計的・数量的分析の重要性を訴えている。経済理論は快楽、効用といった概念を使ってきたが、現実の政策を分析するためには、政策や社会改革の効用や代価を客観的に評価しなくてはならず、そのためには統計的方法が不可欠なのである。この

かなか難しい。開発途上国の場合には統計データの正確さが保証されないという根本的な問題がある。しかし、それ以前に、統計指標があまり意味を考へることなく作成・利用されることの弊害も無視できない。このような問題は、重要な研究成果を遺してきた人にも無縁ではない。すでに広く利用されて定着した統計指標として景気動向指数は代表的なものである。この景気動向指数の基礎を作った経済学者

ように述べたミッチェルではあったが、理論と統計的分析の間の架け橋を実際に作るのには苦労した。実際、ミッチェルたちが作った景気指標に対してクープマンズは変動パターンの単なる観察という「理論なき計測」である、という厳しい批判を行い有名になった。もともと、クープマンズの批判を読んでみると統計指標の変動パターンに関する観察を積み上げていくミッチェルたちの作業自体を全く否定しているわけではなく、ただ、そこから出てくる推論が経済学理論によって吟味されないことを問題にしているものであった。

経験法則だけによりかかった予測では大きな経済変動に直面した時の判断を間違える可能性がある。その意味ではクープマンズの「理論枠組み」の重視の姿勢は重要なのであるが、理論的にもっともらしくても、その前提がデータからの観察に適合していないのであれば、いくら理論的には整合的な議論でも、現実との接点を全くもたないかもしれない。盛んに行われている未来予測にしても、理論モデルの現実への適合度が吟味されなくてはならない。クープマンズの「理論なき計測」という書評から三〇年近く経った一九七三年に、経済学者のノードハウスが、今度は「データなき計測」という書評論文を書いている。これは環境問題で有名な『成長の限界』の基礎になったフォレストターのシミュレーション・モデルには実証的妥当性が乏しいパラメーター

設定が行われていることを批判したものであった。「理論なき計測」にしても「データなき計測」にしても、筆者自身、人ごとではない問題である。とは言っても、統計資料に向き合うことなくして開発途上国の問題は理解できないのも確かである。そこで開発問題で利用される開発指標の解説をしていきたい。

● **むすび**

「計測」と「要約」という使命に応えられるように、これまで様々な開発指標が提案されてきた。表は開発指標のおおまかな流れをまとめたものである。この表にあるように、開発指標の展開には必ず画期的な開発研究の新しい展開があるのが普通である。たとえば国内総生産(GDP)に代表される国民経済計算にはケインズ経済学、貧困やエンパワーメントの指標にはアマルティア・センたちの「ケイパビリティ」理論の展開が関わっている。とはいえ、統計指標の解説は随所の散らばっていて、利用者が必要に応じて調べるのが実情である。また統計指標のなかには景気動向指数のように、その経済学的根拠が今でも議論されているものもある。そこで、これから毎回読み切り形式で開発指標の意味と背景、利用方法や論争などを紹介してみたい。

(のがみ ひろき/アジア経済研究所 開発研究センター)